

平成 27 年度 第 3 回高岡市総合教育会議 会議録

I 日時 平成 27 年 11 月 25 日 (水) 午後 4 時 00 分～午後 5 時 05 分

II 場所 高岡市役所 3 階 庁議室

III 出席者 高岡市長 高橋 正樹
高岡市教育委員会
教育委員長 河田 悦子
教育委員 山崎 隆志
教育委員 長谷田祐一
教育委員 森 美和
教育長 氷見 哲正

事務局関係

総務部

総務課長

廣瀬由美子

総務課副主幹

木村 文徳

福祉保健部

子ども・子育て課長

山田 晃

参事・健康増進課長

宮崎 晃一

教育委員会事務局

理事・教育次長

長井 一弘

総務課長

戸田龍太郎

教育次長・学校教育課長

阿尾 行将

生涯学習課長

笹島 永吉

教育次長・文化財課長

高田 克宏

参事・福岡教育行政センター所長

谷内 則之

総務課副主幹

島田 輝

IV 傍聴者 なし

VI 協議の概要

1 開会

- ・ 市長あいさつ

〔市長〕

教育大綱の策定に関する協議は、今回が最後となる。本日は、前回の会議で出された意見を踏まえ修正した案を提示し、教育委員の皆様から意見をいただきたい。

2 協議事項

- ・ 高岡市教育大綱（案）について

教育委員会事務局から、高岡市教育大綱（案）について説明した後、次のような意見交換があった。

〔市長〕

「校種間連携」とは、子どもたちを預かる機関が連携し、環境変化による影響を極力なくすることが趣旨であると思うが、校種間という言葉からは、小学校と中学校あるいは中学校と高校との連携を連想する。保育園や幼稚園、認定こども園も含む表現と考えてよいのか。

〔教育長〕

趣旨はその通りだが、表現については再考の余地があると思われる。

〔山崎教育委員〕

「個性」という言葉をもっと奥深いものとして捉えてほしい。個性的であることは必ずしも変わったことをするという意味ではなく、自分の人生の設計力や構想力を身につけていることだと思う。目標に向かって、いかに早く努力するか、これが個性につながる道である。そのような意味で、「教育環境の創造」は、個性を受け入れる風土をつくっていくことが重要と考える。

また、学校で道徳を教えることは大切なことだと思うが、教科化され成績をつけることが価値観の押しつけとなり、個性と逆の方向に働くのではないかと懸念している。

〔河田教育委員長〕

「心の教育・道徳教育の充実」は非常に大切であるが、そのことに結び付かないような教科化が行われるのではないかという心配の声があることも事実である。

国の方針である道徳の教科化を見据え、本来の道徳教育を逸脱することのないように評価方法など指導体制を考えていく必要があると考える。

〔教育長〕

学習指導要領の改正により、小学校では平成 30 年度、中学校では平成 31 年度から、「特別の教科 道徳科」として実施される予定である。評価については、数値化せず文章で表現すると聞いており、個性を伸ばす教育を阻害することにはならないと考えているが、道徳教育の今後について注視していきたい。

〔長谷田教育委員〕

「社会全体で人を育む絆の創造」に関し、最近では家族のつながりが薄れているように思う。地域で子育てを支え合う体制づくりは確かに大切なことであるが、その基礎となるのは家族であり、家族で子育てを支えるということも忘れてはならない。家族のあり方は、将来の生き方を考える教育や住みたいまちに向けた取り組みにもかかわってくると考える。

〔河田教育委員長〕

社会の有様に変化し、人と人とのつながりが希薄化している今日においては、家族という視点は非常に大切である。大綱案には、人間関係の基盤に家族・家庭があり、地域によって支えられているという望ましい姿が述べられており、冒頭の「人がまちを創る」という言葉に全てが包括されていると理解している。

〔森教育委員〕

「特別支援教育の充実」については、支援を受ける側だけでなく、支援をする側の子どもに対する教育も盛り込んでどうか。障害のない子どもが障害のある子どもと同じ空間で共同作業をする機会が増えれば、障害者に対する適切な支援を自然と身につけられるのではないかと思う。

〔市長〕

学校教育における活動が、将来大人になったときの障害者に対する支援につながるように、支援をする側の子どもに対する教育の意義についても盛り込みたい。

〔市長〕

本日いただいたご意見を踏まえ、修正すべき点を修正し、12月下旬に高岡市教育大綱を策定することとしたい。修正の内容については、私に一任いただくことで了承願いたい。

3 その他

特に意見なし

4 閉会